コルチェスター便り vol.1（Dec 2018）

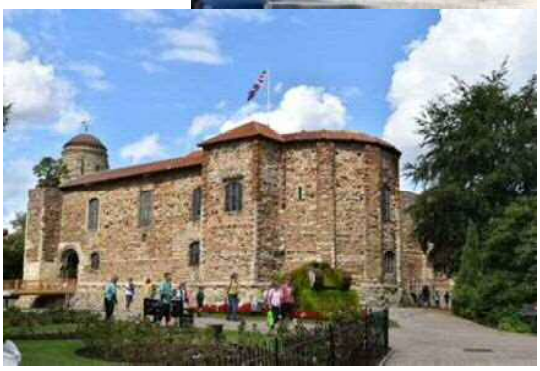
法学部准教授・林　晃大（行政法）

現在私はイギリスのコルチェスターにあるエセックス大学（University of Essex）の法学部及び人権センター（School of Law & Human Rights Centre）において、2018 年 8 月 28 日～2019 年 8 月 27 日の予定で在外研究中です。この「コルチェスター便り」では、近畿大学法学部の皆様に近況をお伝えします。

◎コルチェスターについて

私が住んでいるコルチェスターは、イングランド東部にある人口約 17 万人（2011 年人口調査）の地方都市です。「大学の街」でもあるため若者も非常に多く、特に中心街は活気に溢れています。また、首都ロンドンへは急行電車で 1 時間～1 時間半程の場所に位置しているため、ロンドンに通勤する人たちのベッドタウンとしても機能しており、ファミリー層も多く住んでいます。

日本人にはあまり馴染みのないコルチェスターですが、こちらでは「イギリス最古の都市」として有名です。古代ローマの文献に属州ブリタニアの最初の首都として登場することからそのように呼ばれているようです。街にはローマ時代の市街壁が多く残されており、現在ではその壁に取り囲まれるような形で様々な店が軒を連ね、中心街（タウンセンター）を形成しています。タウンセンターはヴィクトリア時代の美しい街並みでも知られており、週末になると買い物客で溢れかえります。この時期（12 月初頭）は日本と同様、街中がクリスマス一色で、週末になるとたくさんのクリスマスイベントが開催されています。



（上）ヴィクトリア時代の街並みとタウンホール

（下）コルチェスター城

ローマ時代の市街壁やヴィクリア時代の街並みとともに、街のシンボルとなっているのがタウンセンターにあるコルチェスター城です。この城は 11 世紀にローマ時代の神殿の跡地に建てられたもので、現在その内部は博物館になっています。ヨーロッパでイメージされるいわゆる童話の世界のようなお城といった雰囲気ではな

（上）（下）キャッスルパーク

く、軍事目的で建てられた要塞のような外観をしています。コルチェスター城の周りにはキャッスルパークと呼ばれる広大な公園があり、野生のリスやアヒルが餌を求めて走り回っています。子供向けの遊具などもたくさん設置されているため、私も夏から秋にかけて子供を連れて何度も足を運びました。

このように私の住んでいるコルチェスターは古代ローマ、中世、ヴィクトリア時代と様々な時代を感じることのできるとても住みやすい歴史的な街です。

◎エセックス大学について

私の在外研究先であるエセックス大学はタウンセンターから車で 15 分ほどの場所にあります。1964 年に設置されたイギリスでは比較的新しい大学ですが、社会科学領域の研究で世界的に高い評価を受けています。特に人権分野の研究は国際的に注目されており、私の所属する法学部及び人権センターも政府から高い評価を受けています。キャンパスはワイブンホーパークと呼ばれる 200 エーカーもある広大な公園の一角に建てられています。キャンパスにも野生のリスやカルガモ、ウサギなどが遊びに来るため、学生たちがこれらの動物に昼食のパンなどを分け与えている姿をよく見かけます。

エセックス大学には大学院生も合わせて 10000 人以上の学生が籍を置いていますが、その 3 分の 1 が世界中（140 ヶ国以上！）から集まる留学生です。ヨーロッパ大陸はもちろん、アメリカ、中南米、アフリカ大陸からの留学生も多く在籍しており、最近ではアジア、特に中国やマレーシアからの留学生が増えているようです。残念ながら日本人留学生はあまり在籍していないとのことですが、キャンパス内を歩いていてもその学生の多国籍な様子に驚きます。学内の食堂やスチューデントユニオン（学生自治会）が経営する店にも多国籍な料

（上）キャンパスの様子（夏休み中）

（下）大学図書館（毎日 24 時間開館）

理や食材が並んでおり、昼食も楽しみの一つです。

私は大学から割り当てられた研究室や大学図書館で研究を行うのと同時に、法学部と人権センターが毎週開催している学内研究会や大学生対象の授業にも出席しています。毎週水曜日 12 時から 14 時には公法や人権法に関する学内研究会が開催されており、そこでは大学教員や大学院生による研究報告とそれに基づいた活発な議論が行われています。日本の公法学領域では馴染みのないようなテーマに関する研究報告も多いため内容を理解するのに必死ですが、わずか 2 時間でクタクタになるぐらい日本では経験できないほどの大きな刺激を受けています。

この「コルチェスター便り」を法学部生の皆さんも読まれていると期待してこちらの大学生向けの授業について少し詳しくお話しします。私が現在出席しているのは「公法の基礎（Foundation of Public Law）」（憲法と行政法がミックスされたものをイメージしてください）という授業です。この授業は“Lecture”と“Tutorial”という２つの形態から成り、受講生はどちらにも出席することが義務付けられます。“Lecture”（毎週１コマ２時間）はいわゆる大人数の講義形式の授業で、5 人の教員がリレー形式で担当します。毎週、テキスト 30～50 ページを読んでから授業に臨むことが義務付けられており、担当教員は細かな語句の説明などは行わないため、予習を怠るとたちまち授業についていけなくなります。“Tutorial”（隔週 1 コマ 1 時間）はいわゆる少人数の演習形式の授業で、“Lecture”で学んだ内容をもとに受講生同士で議論を行います。つまり“Lecture”に出席していないと“Tutorial”での議論についていくことができないため、受講生は必然的に両形態の授業に真剣に取り組まざるを得ないというシステムになっています。そして、最終的にはレポートと定期試験（3 時間）で成績評価が行われるとのことです。

「公法の基礎」“Lecture”の様子。後から座席が埋まるのは日本と同じ。

◎おわりに

日本でも大きく報道されていると思いますが、イギリスは現在“Brexit”という社会変革に取り組んでいます。イギリスがどのような形で EU 離脱を果たすのか、その見通しは現時点（12 月初頭）では不明瞭ですが、予定されている 2019 年 3 月 29 日にこの地で生活できることは私にとってとても得難い経験となりそうです。次回の「コルチェスター便り」ではその辺りも含め、イギリスでの生活についてもお伝えできればと考えています。

最後になりましたが、在外研究の機会を与えてくださった近畿大学の関係者の皆様、快く送り出してくださった法学部教職員の皆様、そして林晃大ゼミの 8・9・10 期生の学生諸君にこの場を借りて厚くお礼申し上げます。